

夏目漱石『心』の発話における文末構造 —物語の展開ならびに内容との関わり—

小野 正弘

1. はじめに

本論考は、夏目漱石『心』の一～三十六（単行本の「上・先生と私」に相当）における発話を対象として¹⁾、その文末構造を分析し、その表現論的貢献の可能性を論じるものである。

今回認定した、一～三十六における発話数は、701あり、そのうち、述語部を有するものは、644を数えた。これが、以下で、割合を示す際の母数となる。

2. 述語部構造認定の基本方針

まず種々の規定をしておきたい。「発話」とは、

[01] 先生は、「もう帰りませんか」と云つて私を促した。(三)

のように、カギ括弧で括られた、発話者と受話者が、基本的に同一の発話空間に属して行なう言語活動を写した箇所を言う。したがって、

[02] 私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。(一)

のように、カギ括弧が付いていても、実際に相手に向かって発話しているのではないものは、発話とは認定しない。

次に、「述語部」²⁾とは、

[03] 先生は突然私に向つて、「君はまだ大分長く此所に居る積ですか」と聞いた。(三)

における、「君は」に対応する「居る積ですか」の部分全体を言う。これに対して、例えば、

[04] 私は急に極^{きま}りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはゐられなかつた。(三)

の場合は、「先生は」に対応する[どうする]に当たるものがない。したがって、[04]のようなものは、述語部がないと認定する。なお、[01]のような、「帰りませんか[どうする]」の部分に対応する[だれが]という要素がなくても、述語部はあると認定する。

「述語部」は、「中心述語」と「連接助辞」³⁾に分ける。前述の[03]の発話部分の基本構造は、「君は ここに ゐる つもりですか」というものになる。これは、北原保雄(1984)における「補充成分」と「修飾成分」の区分に基づくものである。すなわち、文のなかの骨格に当たるものだと考えればよい。このとき、「ゐる つもりですか」のなかで「君は ここに」と対応するものは「ゐる」であって、「つもりですか」ではない。すなわち、[03]を「君は ここに つもりですか」と分析してはナンセンスなものになってしまう。このとき、[03]における「ゐる」を「中心述語」と呼ぶことにする。そうすると、「つもりですか」が残るが、これを中心述語に接続した助辞と捉え、「つもり・で

す・か」の3要素からなる「接続助辞」と呼ぶことにする。

さて、以上の方針に基づいて、中心述語の種類と数を整理すると、次のようになる。なお、括弧内は%、小数点第二位を四捨五入した(以下同様)。

動詞	405(62.9)	名詞	90(14.0)
形容詞	66(10.2)	副詞	21(3.3)
形容詞語幹	54(8.4)		
動詞連用形	4(0.6)		
文節	2(0.3)		
名詞句	1(0.2)		
連体詞	1(0.2)		

こうしてみると、中心述語としては、動詞がほぼ三分の二を占めて最も多く、名詞、形容詞がそれに次ぐということになる。なお、この「形容詞」は、学校文法でいう「形容詞」と「形容動詞」を併せたものである。

なかに、「形容詞語幹」というものがあるが、これは、今回の分析で工夫したところである。たとえば、

[05] 然し御邪魔なんですか(七・私→先生)

[06] とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。(十三・先生→私)

のようなもので、[05]の「御邪魔」は、学校文法でいう「形容動詞」の語幹に相当し、[06]の「よ」は、同じく形容詞「よい」の語幹である。

形容詞語幹というカテゴリーを設けることで、

(1)「だ」「です」の選択を助辞のなかに組み込める

(2) [05]のようなタイプを、名詞と関

連づけることができる

(3) [6] のようなものを位置づけることができる

という利点がある。(1)を補足すると、学校文法における「形容動詞」は、「健康だ」「健康です」のように、同一の語幹で「だ」終止型と「です」終止型の二つが認められているが、語幹までを中心述語とすれば、「だ」「です」の選択は、接続助辞の枠組で処理できることになる。

また、副詞述語文というカテゴリーも考える。これは、従来あまり指摘されてこなかったようにも思われるが、一定数存在する。たとえば、

[07] それは左右かも知れません。(十三・私→先生)

のようなものである。ただし、助辞のタイプは名詞とほぼ同じ⁴⁾で、たとえば、「あれは山かも知れません」を並置してみれば、それは諒解できるだろう。中心述語になりうる副詞は、[07]の「さう」のような、「こそ(かさ)あど」に「う」の付いたタイプのもの、「なぜ」「いかが」等が観察された。

なお、今回は、文末の述語部構造に限定して考え、従属節等におけるものは除く。従って、[06]では、「罪悪ですよ」を採らず、「よござんすか」を採る。ただし、倒置の場合は、文末でなくても採る。

次に、中心述語に接続する助辞について確認しておく。たとえば、

[08] 私の過去はあなたに取つて夫程^と有益^{それほど}でないかも知れませんよ。(三十一・先生→私)

の場合、中心述語は「有益」で、述語の種類は形容詞語幹である。これに後接する「でないかも知れませんよ」が、接続助辞

ということになる。これを、要素に分解することになるが、ここでは、「で・ない・か・も・しれる・ます・ん・よ」と最も細かく⁵⁾切り出すことにする。したがって、この連接助辞の数は8ということになる。そして、この8が、今回の分析の最大値でもある。

一方、助辞の最小値は0であり、たとえば、

[09] 其説明が又あなたを焦^ぢ慮^りせるような結果になる。(十三・先生→私)
のようなもので、中心述語は動詞「なる」で、その後の接辞はない。

接辞数の値とその割合を示すと、次の通りである。

8- 2(0.3) 7- 2(0.3) 6- 28(4.3)
5- 51(7.9) 4-103(16.0) 3-156(24.2)
2-182(28.3) 1-101(15.7) 0- 19(3.0)

すなわち、接辞数の値が最も多いのは2であり、3がそれに次ぐ。[08]のような長いものはあまりなく、総体として短めのものが多い。

また、今回の分析において、もう一つ工夫したことは、融合形や音便形をそのままで認定したことである。これは、次節でみる表現論的分析においても効果的であると思われる。たとえば、

[10] 別に何^{どこ}処^{どこ}も悪い所^{わる}はない様^{よう}ぢやありませんか(十一・私→先生)

の場合、中心述語の形容詞「ない」に後接する連接助辞「様ぢやありませんか」を、「やう・ぢや・ある・ます・んnu・か」と分析し(したがって、助辞数は6)、このなかの「ぢや」を語源にさかのぼって「で・は」としないのである。同様に、

[11] 覚^さめた結果として左^さ右^う思^{おも}ふん^んです(十四・私→先生)

における中心述語の動詞「思ふ」に後接する連接助辞「んです」の音便形「ん」をこのままの形で認め、[の]には戻さず「んno・です」のようにする。この結果「ん」には2種類あることになるが、連接助辞の表示では「んnu」「んno」のように区別する。

3. 述語部構造分析の表現論的寄与

さて、前節のような述語部構造の捉えかたをすると、どのような表現論的貢献が可能なのかについて述べたい。

まず、述語部の連接助辞内に、敬語要素があるかどうかという問題について考察する。

敬語は、ひととひととの距離をつくり出す機構とされる(南不二男1987等)。逆に言えば、敬語がなくなるということは、自分(たち)の側に迎え入れているということになる。

『心』一～三十六において、私→先生ならびに私→奥さんの発話には、ほぼ一貫して敬語(丁寧語含む)が用いられるのに対して、先生→私、奥さん→私には、当初は敬語が用いられていたものが、次第に敬語なしに遷っていくことが認められる。それを数値化すると次の通りになる。

●先生→私	敬語あり	なし
一～九	48(94.1)	3(5.9)
十～二十	66(88.0)	9(12.0)
二十一～三十六	88(71.0)	46(29.0)

●奥さん→私	敬語あり	なし
一～九	0	0
十～二十	83(83.0)	17(17.0)
二十一～三十六	17(50.0)	17(50.0)

先生も奥さんも、あとになるほど、敬語ありの発話が減っていることが見てとれる(なお、奥さんと私の会話は、十になるまで現われない。また、二十一で区切ったのは、この回から場面が変わり、さらに言うと、夫妻と私の親密度が高くなってゆくと判断されることによる)。〈敬語あり〉から〈敬語なし〉へと、どのように遷っていくかを、さらに具体的に見る。まず、初めて〈敬語なし〉の発話になったものは、

[12] 先生は何とも答へなかつた。しばらくしてから、「私のは本当の墓参り^{だけ}丈^{だけ}なんだから」と云つて、何処迄も墓参^{どこまで ぼさん}と散歩を切り離さうとする風に見えた。(六)

である。これは明確な対人発話かどうかやや微妙であり、つぶやきのようにも解されるものである。それが、

[13] 実^{さつぎさい}は先刻妻と少し喧嘩をしてね
(九、先生→私)

となると、明確な対人性あるものとなり(共感を求める機能を持つ終助詞「ね」がそのことを表わしている)、発話の内容もプライベートな内輪話となっている。すなわち、〈敬語なし〉の発話として表現されることにより、先生が私との距離を縮め、いわゆるウチのものとして扱っていることが表現されていると言える。

一方、奥さんは、

[14] 議論はいやよ。よく男^{かた}の方は議論^{から さかつき}だけなさるのね、面白^{おもしろ}さうに。空の盃^{けんしゆう}でよくああ飽きずに献酬^{けんしゆう}ができると思^{おも}ひますわ(十六、奥さん→私)

のような発話において、話し始めは「いやよ」のように〈敬語なし〉を用いていながら、その後は「なさる」「ます」といった

〈敬語あり〉を続けているところが観察される。この「いやよ」も、自分の気持を生々しく表現していると言えよう。ちなみに、奥さんの〈敬語なし〉は、この十六から現われ、先生の性格について、私とやり取りをしている、プライベートな内輪話の場面であり、これもまた、奥さんが、私との距離を縮め、ウチのものとして扱い始めたことを物語っている。

さらに最後の三十六近くになると、

[15] ぢや随分御機嫌よう。私達もこの夏はことによると何処^{どこ}かへ行くかも知^{あつ}れないのよ。随分暑^{あつ}さうだから。行つたら又絵端書^{がき}でも送^{おく}つて上げませう
(三十四、奥さん→私)

[16] そんなに容易^{たやす}く考へられる病^{たやす}気ぢやありませんよ。尿毒症^{によう}が出ると、もう駄目^{だめ}なんだから(三十四、先生→私)
のように、プライベートではあるが内輪話とは言えない客観的な予定[15]や、相手の側のプライベートな問題[16]についても、〈敬語なし〉を用いるようになっている。

これらの表現(の遷りかわり)をコントロールしているのは、言うまでもなく、作家たる夏目漱石である。しかし、この敬語のありなしを、いちいち自覚的に表現し分けていたのだろうかという疑問も抱く。つまり、漱石が、夫妻と私の仲がよくなったことを、ひとつ、敬語を少なくすることで表わしてやれ、などと考えながら(ときに、いったん書いた敬語を削除するなどしながら)表現していった、とは考えにくいように思う。むしろ、夫妻と私の関係の深まりを、リアルに描こうとしたところ、このような表現として結実したと思いたいのだが、いかがであろうか。

次に、前節でも触れた、〈音便形〉と〈非音便形〉の表現論的意味について考察する。次のやり取りを見てみよう。

[17]「あんまり逆上^{のぼ}ちやいけません」と先生がいつた。

「覚めた結果として左右思ふ^{さう}んです」と答へた時の私には充分の自信があつた。其自信を先生は肯がつて呉れなかつた。

「あなたは熱に浮かされてゐる^{おつ}のです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたから夫^{それ}ほどに思はれるのを、苦しく感じてゐます。然^{これ}は是^{さき}から先の貴方^{あなた}に起るべき変化を予想して見ると、猶苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思はれてゐる^んのですか。それ程不信用な^んのですか」

「私は御気の毒に思ふ^いのです」

「気の毒だが信用されないと仰しやる^んのですか」[中略]

「信用しないつて、特にあなたを信用しない^{んぢ}やない。人間全体を信用しない^んです」(十四)

このやり取りでは、当初、私が音便形「んです」を、先生が非音便形「のです」を用いていたものが、終わりのほうになると、先生も音便形「んです」に遷る。先生の「熱に浮かされてゐる^のです」「気の毒に思ふ^のです」あたりの発話において、先生は冷静さを失わず、私に対して諭すような口調となっている。それに対して、私のほうは、「左右思ふ^んです」「軽薄に思はれてゐる^んのですか」「信用されないと仰しやる^んのですか」と、感情的にのめり込んだような口調である。

それが、私とのやり取りを続けているうちに、先生は「あなたを信用しない^{んぢ}

やない」「人間全体を信用しない^んです」というように、自らの真情を吐露する。

ここで、先生→私の発話における、「の」が音便形か否かのデータをみると、次のようになっている。

	「の」系	「ん」系
一 ～十五	20	8
十六～三十六	7	16

前半と後半とでは、音便形と非音便形が逆転している。これが単なる偶然なのかどうか。

先生は、当初、私に対しては距離を置いて(前記、敬語系のデータもそれを裏付ける)突き放したような態度を取っていた。それが、前述の諭すような口調にも表れていた。それが、ふたりで議論を重ねていくうちに、私の先生に対する「真面目」さ⁶⁾が伝わりはじめ、近しい、自らの真情を吐露するような表現へと遷っていく⁷⁾のである。

敬語系と非敬語系の問題のところでも述べたが、書き手(作家)は、発話部分に「の」の音便形を用いるか非音便形を用いるかについて、いちいち理屈を考えながら表現しているとは、とても思えない。そうではなくて、むしろ、リアルさを追求する、かなり瞬時の判断(演算)によって、いずれかが表出(算出)されているのではないだろうか。

表現論的な寄与として、もう一つ、ある個人に特有の述語部(なにかんずく、連接助辞)は観察されるかという問題について述べて、稿を終えたい。

先生の発話を観察していると、「だから」を発話文末の述語部に用いている例が目につく。たとえば、

[18] ①「私は先刻^{さつき}そんなに昂奮したやう

に見えたんですか」

②「そんなにと云ふ程でもありませんが、少し……」

③「いや見ても構はない。実際昂奮するんだから。私は財産の事をいふと屹度昂奮するんです。君には何う見えるか知らないが、私は是で大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりも猶昂奮してゐた。然し私の驚ろいたのは、決して其調子ではなかつた。寧ろ先生の言葉が私の耳に訴へる意味そのものであつた。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかつた。[中略]

④「私は他に欺むかれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄背負はされ通してゐる。恐らく死ぬ迄背負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出来ないんだから。然し私はまだ復讐をしずにゐる。考へると私は個人に対する復讐以上の事を現に遺つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覚えてたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」
(三十)

いささか長い引用になったが、これぐらいでなければ、特徴が見えてこないの

で、そこは諒とされたい。この引用においては、③での「ん・だから」の3連続使用(④にも、もう1回あり)が目を惹く。論理的に考えれば、原因・理由の従属節相当で、述語が略されたものと解せないでもない。しかし、たとえば、③の「私は是で大変執念深い男なんだから」を次の「屈辱や損害は十年立つても二十年立つても忘れやしない」の原因・理由だとしても、この屈辱や損害は十年立つても二十年立つても忘れやしない」自体にも「だから」が連接されているのである。これは、なにかの原因・理由になっていると考えるよりは、ここで文は終止していると考えたほうが妥当であるように思う⁸⁾。そして、この「だから」が畳みかけるように文末に用いられているのは、[18]の①と②のやり取りでの「亢奮」が関与していると思われる。すなわち、①で、先生は私に、自分は亢奮しているように見えたかと訊き、②で私がそれをやんわりと肯定すると、③では、亢奮しているように見えても構わないと宣言して、長広舌が始まるのである。つまり、先生にとっての文末の「だから」は、亢奮して、自らの感情を吐露するものとして表現されていると言えそうである。そのことは、「だから」の前に、前述した音便形「ん」が観察されることでも裏付けられる。さらに、④においては、非音便形の「のです」が連続して観察される。これは、自分の感情の吐露ではなく、親戚から受けたひどい仕打ちという事実の提示の際に用いられていることにも注意しておきたい。ここにおいても、「の」の音便形と非音便形が鮮やかに対照的に表現し分けられているのである。

このように、先生の「だから」は、先生の感情と密接なつながり⁹⁾を持って表現されている。今まで挙げた例の[12][16]にも、「(ん)だから」は観察されるが、やはり、言い訳([12])、心の底からの忠告([16])の場面で用いられている¹⁰⁾のである。

4. おわりに

近代文献の発話から抽出できる(とはいえ、上質のものでなければならぬ。『心』は、その一つと言えよう)、述語部構造は、当時の口語パターンの資料として価値があるばかりでなく(男性語・女性語・子供の言葉・江戸言葉……)、登場人物の微妙な心情を表現しているという点で、表現論的な高い価値を有する。また、このような複雑で数多くのパターンを自在にあやつり、あまつさえ、パターン変遷も行なっていることに、驚歎の念も禁じ得ない。また、現代語資料からこのようなパターンを抽出すれば、汎用性の高い日本語教育の資料となるかもしれない。

[付記] 本論考は、2019年6月1日に明治大学駿河台キャンパスを会場として行なわれた、第56回表現学会全国大会のシンポジウム「述語部構造と表現性」において、パネラーとして報告した内容を、その後の考察も加えてまとめ直したものである(副題も変更した)。したがって、当日の内容が、すべてそのまま述べられているものではない。

参考文献

小野正弘(2004)「デス・マス体の文章—

山田美妙—」『国語論究 11 言文一致運動』明治書院

小野正弘(2012)「近代語文献の述語部構造分析の方法—地の文と発話を対比させながら—」(日本近代語研究会 第298回研究発表会、2012.11.24)

小野正弘(2017)「近代語文献の述語部構造分析の方法—地の文と発話を対比させながら—」『日本近代語研究 6』ひつじ書房

北原保雄(1984)『文法的に考える—日本語の表現と文法—』大修館書店

白川博之(2009)『「いいさし文」の研究』くろしお出版

藤田保幸(2017)「複合辞であることを支える共時的条件—動詞句由来の複合辞を中心に—」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』26

藤田保幸(2019)「森鷗外訳「地震」「悪因縁」の文章をめぐる」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』28

藤田保幸／山崎誠(2006)『複合辞研究の現在』和泉書院

松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2

松木正恵(2010)「複合辞研究史Ⅷ「複合辞性」の再検討と複合辞の位置づけ」『早稲田大学教育学部 学術研究(国語・国文学編)』58

南不二男(1987)『敬語』岩波書店

注

(1) 引用は「漱石全集第九巻」岩波書店、1994年(「心」という作品名表記も同全集に倣う)に拠る。

- (2) 学校文法における国語教育では「述部」という言いかたが行なわれるが、以下に述べるところから明らかなように、今回の分析対象といわゆる「述部」はかなり概念的に異なるものである。
- (3) シンポジウムの際には、「(複合) 助辞」という術語を用いたが、当日の松木正恵氏による指摘、ならびに、このシンポジウムのあとに行なった研究発表(7月27日の中部日本・日本語研究会「複合助辞認定・設定についての技術的問題—漱石『心』を題材に一」)における討論、ならびに、松木正恵(1990・2010)、藤田保幸(2017)等を踏まえ、呼びかたを改めた。その理由ならびに根拠については、上記発表をまとめる際に詳述する予定である。
- (4) [夫婦・のようだね]、? [そう・のようだね] / *「いかが・のようだね」と並べてみると、[のようだね]の後接では、名詞と副詞では差がある。
- (5) この切りかたには、別案もありうる。すなわち、「かもしれない」には、「かもしれない」という肯定形はないので、「しれない」を「しれる・ない」とせず、「しれない」でまとめた一単位とみるものである。この問題については、注(3)の研究発表の討論の際にも問題になったもので、別稿で詳述する予定である。このとき、まとめた単位は区切らないという考えかたによる藤田保幸(2019)とは、接辞の数値などで単純に比較できないことは、注意しておくべきことである。なお、区切れるところは最大数区切るという方針については、上述の研究発表の際の、北崎勇帆氏(高知大学)の示唆が有益であった。
- (6) 「真面目」というキーワードは、この『心』の十七、三十一に現われる。しかし、「私」はこのときになって突然真面目になっわけではなく、先生という人間の探究を、一貫して真面目に行なっているように造型されている。
- (7) とはいえ、この「の」の音便・非音便の問題は、親疎のみならず、話題等でも変わってくるかもしれない、今後のさらなる掘り下げが必要である。しかし、表現論的に見れば、一部の文法研究に見られるような、「のです」と「んです」を区別せず分析したり、「の」は文章語的で、「ん」は口語的といったりするような、おおざっぱな把握では済まない。「の」も「ん」も「口頭語」なのである。
- (8) そうすると、これらの「だから」は、白川博之(2009)でいう「いいさし文」に相当するものではないかと思われる。
- (9) 唐突かもしれないが、現代日本語で、「だから」を終助詞のように用いるキャラクターとして思い浮かぶのは、いわゆる「ツンデレ」系であり、「あたしだって忙しいんだからねっ!」のような発話が特徴的である。論理性を問おうと言えれば可能であるが、それよりも、「だから」のあとが表現されていないことで、「あとは自分で考えなさい(いちいち教えないんだから)」という気分が表れているように解したほうがよいように思われるが、それは、[13]の③でも看取できるように思われる。100年前に、現代のキャラ語を先取りしているとすれば、面白い。
- (10) [12]は、先生が私に使った、最初の無敬語の例でもあった。

(明治大学)